

2019
秀作

第52回「おかねの作文」コンクール

おも 両親の想い

千葉県・日出学園中学校 2年 大石 真妃

「あーあ。ママもアナタみたいにお金をかけて育てられたかったよー。羨ましいっ。」

物心ついた頃から時々、母から言われていた言葉だ。そう言われても、私は自分が欲しい物を何でも買ってもらっていた訳ではないし、これといって実感も持たなかった。その意味を知るのは、2年前の春のことだ。

当時私は小学5年生を間もなく修了する頃で、突然父を亡くした。「突然」という言葉しか当てはまらないくらい、その日は本当に突然のことだった。

家のお金は父が管理していたらしく、母は父と結婚して12年も経っていたのに公共料金や私の習い事の月謝だけでなく、学校にかかわるお金や父のお給料、貯金の一切を知らないと言った。

……そんな事、あるのか？ なんて、おめでたい人なんだ？

父の部屋から3冊のノートと紙袋が出てきた。そこには番号がふられた通帳が、きちんと番号順にまとめられて入れられていた。その存在は母も知らなかった。通帳だからもちろんお金の収入や支出がわかる。初めて父の通帳を目にして驚いたのは、支出のお金の横に細かく丁寧に書かれた文字であった。「真妃、幼稚園代」「真妃、習字代」「真妃、プール代」「真妃、英語教室代」私にかかわるお金の内容ばかりだった。こういうことだったんだな。通帳を見せてもらわなければ、気づけなかったこと。通帳には書かれていなかったけれど旅行やディズニーランドの年パス、誕生日プレゼント、思い出しただけでもたくさんのお金が私にかかっている。

「今の状況を決して当たり前とは思わないでほしい。」

と、母から言われるのも自分ではわかっている。父の希望もあり私は今、中高一貫校に通わせてもらっているからだ。合格した時に、「合格したけれど公立に行きます、っていうのもアリだよ。」

と言う母に、

「せっかく合格できたんだから行きたい。」

と伝えた私。それからの母は学校でかかるお金、公共料金や税金、食費、習い事のお金を隠そうともせず全て私に伝えてくる。習い事の数千円、夏期講習代や英語キャンプの数万円、学費の引き落としは年に4回……。

「遊ぶお金は毎回あげられないけれど、勉強に関するお金だったら出してあげるからね。」なんて言われると、喜んで良いのか複雑な気分になる。けれども冷静に考えてみれば、これは喜ぶべきことなのだと思う。そういえば友達と遊ぶお金にしても、

「ダメだね。」

と言いつつ、遊びに行けなかったことは今まで無い。父がいないからという理由で、お金をかけて学ぶことや友達と遊びに行くことを我慢させたくないと言ってくれる母の想いが時として重たく感じることもあるが、母は母で色々悩みながらそうしてくれているのだと感じる。

今年に入って間もなく、母は私の反抗期を理由に「仕事なんてしている場合じゃない。」と、自分の仕事を辞めてしまった。正直どうしようと思った。私のせいで仕事を辞められては、色々とかかるお金はどうするのか。それなのに、今までと変わらず習い事にも通わせてもらい、友達と遊ぶ時もお小遣いを渡してくれる。私は自分のことしか考えていない自分が恥ずかしく思えた。好きな仕事を辞めてまで私と向き合おうとしている母の覚悟はどこまでも本気だ。お金の心配をする私をよそに、

「何とかするし。」

と、あっけらかんとしている。

「心配するくらいなら、早く反抗期から脱出してくれ。」

と、何とも母らしい言葉が返ってくる。

「それよりも……。」

「アナタが今、学校や習い事に通わせてもらえるのも、アナタの反抗期を理由にして私が家にいることも、全てはパパのおかげだということを忘れないようにしなさい。」

この言葉に私はハッとした。もちろん忘れてはいない。けれども、感謝をしな

がら過ごしてきたかと聞かれたら、返事に困る。

両親は私に、見返りを求めずに色々とお金や時間、労力を費やしてくれている。その気持ちを無駄にすることのないように、今、目の前にある学業を頑張って、夢を叶えるために本気で突き進んでいきたい。私には何事にも本気で取り組む両親の血が流れているのだから。

